岐阜県政記者クラブ加盟社　各位

令和５年４月１８日(火)　岐阜県発表資料			
担　当　課	担当係	担当者	電　話　番　号
文化創造課 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会	文化創造係	西尾 奥富	内線 3119 直通 058-272-8378 FAX 058-278-3529

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE ２０２３
大賞・審査員賞の決定及び表彰式・開場式の開催について

県では、想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的とした全国的な企画公募展「清流の国ぎふ芸術祭　Art　Award　IN　THE　CUBE」を、３年に１回のトリエンナーレ方式で開催しています。

このたび、令和５年４月９日（日）に開催した二次審査会の結果、入選１４作品の中から大賞及び審査員賞を決定しました。

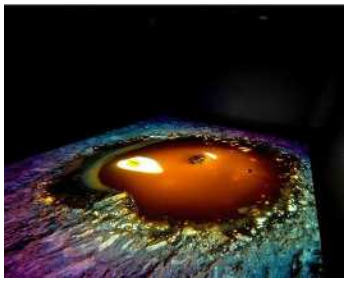
ついては、清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2023 の開催にあたり、会期初日の４月２２日（土）に表彰式・開場式を実施しますのでお知らせします。

記

１　大賞及び審査員賞

（１）大賞（１作品）

作　品　名	氏　　名
Melting Hida Mountains	千葉 麻十佳


大賞受賞作品

（２）審査員賞（６作品）

審査員賞名	作　品　名	氏　　名
入江経一 賞	触れるもの、絶対に触れないもの	柴田 美智子
岩崎秀雄 賞	橋の形	古屋 崇久
北村明子 賞 寺内曜子 賞	INTER-WORLD/SPHERE: Over The Cube	奥中 章人
四方幸子 賞	ネットショッピング	北川 純
森村泰昌 賞	NAGAMERU	小孫 哲太郎
山極壽一 賞	JK in the street.（普通の女子高生）	INAGAKI MOMO

※受賞作品・審査員の詳細及び審査講評については、**別添**をご参照ください。

２　表彰式・開場式

（１）開催日時　令和５年４月２２日（土）１３：３０～１４：３０
（２）開催場所　岐阜県美術館（岐阜市宇佐４－１－２２）
（３）出 席 者　入賞・入選作家、審査員、知事、県議会議長、
清流の国ぎふ芸術祭運営委員会委員長　神戸峰男（かんべみねお）氏、
Art Award IN THE CUBE 実行委員会会長　土屋明之（つちやあきゆき）氏、
岐阜県美術館長　日比野克彦（ひびのかつひこ）氏　等
（４）内　　容　①表彰式（会場：多目的ホール）　１３：３０～１４：２０
・主催者挨拶（知事）、審査員紹介、大賞・審査員賞授与、
審査員講評、入選作家紹介　等
②開場式（会場：企画展示室前）　１４：２５～１４：３０
・テープカット

３　清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2023 の概要

（１）開催期間　令和５年４月２２日（土）～６月１８日（日）
※開館日　５０日間、休催日：月曜日
（２）開催場所　岐阜県美術館　展示室
（３）テ ー マ　「リアル」のゆくえ
（４）展示点数　入選作品１４点
（５）賞　　金　大賞　５００万円（１点）、審査員賞　１００万円
（６）観 覧 料　無料
（７）主　　催　清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 実行委員会、岐阜県
（８）そ の 他　会期中には、審査員や入選作家による関連イベントも実施します。
各プログラムの詳細については、**別添チラシ**をご参照ください。
（会場：岐阜県美術館／参加費：無料／要事前申込（先着順））

※「バーチャル鑑賞」コンテンツからもご鑑賞いただけます

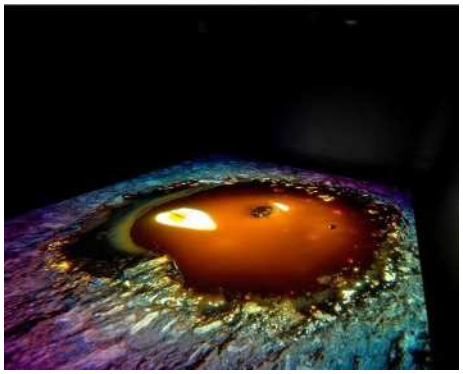
・スマートフォンやパソコンなどを使って、展覧会場をリモートで体験できるコンテンツ（３Ｄビュー映像・３６０°動画）を公開します。
［公開日時］令和５年４月２２日（土）１４:３０～
［閲覧方法］Art Award IN THE CUBE 公式ホームページからアクセスしてください。
(https://art-award-gifu.jp)

＜参考：清流の国ぎふ芸術祭について＞

・県では、６９回の歴史を刻んだ「岐阜県美術展」を、時代の変遷や表現の多様化に合わせて見直し、新たに「清流の国ぎふ芸術祭」として次の３つを柱に展開中
①Art Award IN THE CUBE（３年に１回）
想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的とした革新的な企画公募展
②ぎふ美術展（３年に２回（Art Award IN THE CUBE のない年））
県民に広く発表する機会を提供する公募展
③アート体験プログラム -アートラボぎふ-
幅広い県民が参加できる美術講座、ワークショップ等を全圏域で展開

Art Award IN THE CUBE 2023　大賞・審査員賞

■大　　賞



千葉 麻十佳／CHIBA Madoka
《Melting Hida Mountains》

・1982 年北海道生まれ。北海道拠点。
・宇宙空間にある太陽から発する光を使い、火山噴火という地球の活動で生まれた火山石を溶かす。石は溶けるとマグマになる。マグマの再現は石の時間を戻す行為であり、土地の歴史を遡る行為である。映像という虚構のマグマの上に立つことは、今いる場所、自然、地球、宇宙などについて思考を巡らす契機となる。

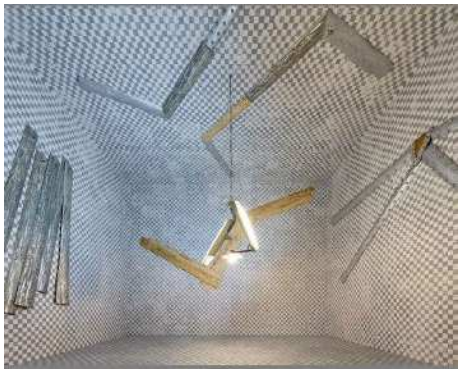
■審査員賞

＜入江 経一 賞＞

柴田 美智子（SHIBATA Michiko）
《触れるもの、絶対に触れないもの》

・1955 年東京都生まれ。東京都拠点。
・箱庭に見立てたキューブの内に、心の物語に現れるたくさんの猿達と、虚構を共有することで知らぬ間に閉じ込められた人間の雛型を置く。物語によって触れ得るリアルと、目に見えない檻によって引き離されてひび割れてゆくリアルは通底するものなのか？

＜岩崎 秀雄 賞＞



古屋 崇久（FURUYA Takahisa）
《橋の形》

・1991 年山梨県生まれ。埼玉県拠点。
・岐阜県は、言わずと知れた大きな一級河川が何本も流れている土地であり、橋の数も計り知れない。その為この土地では、橋に対する恩恵をより大きく受けているのかもしれない。美術館周辺・岐阜県内を中心に河川等で橋の形をリサーチ。橋の概念、形に関して考察しキューブに落とし込む。

＜北村 明子 賞／寺内 曜子 賞＞ 	**奥中 章人（OKUNAKA Akihito）** **《INTER-WORLD/SPHERE: Over The Cube》** ・1981 年京都府生まれ。京都府拠点。 ・キューブをはみ出すように膨らむ紅色透明風船。中に入ると鑑賞者は床に敷かれた水面の上に寝転がることができる。仰ぎ見ると、たゆたう鏡面世界が広がり、人の存在が、水、空気、光の膜を通じて環境に干渉し揺らめく。光源や角度で色合いが変化する作品の表象は、自己の変動性や多面性、人間の多様性社会を肯定し、また空気や水、光を通じて環境の重要性を暗示している。
＜四方 幸子 賞＞ 	**北川 純（KITAGAWA Jun）** **《ネットショッピング》** ・1965 年愛知県生まれ。山梨県拠点。 ・ネットショッピングという行為が日常化し、近年のコロナ禍によりその勢いは増加の一途を辿るのみである。巨大ダンボール箱が横転し、地面に沈み込んだ状態がキューブの規定サイズとなっている。その蓋の隙間から鑑賞者が出入りできる。内部空間では鑑賞者自らがシュリンク梱包された商品になってしまうような体験が待ち受けている。
＜森村 泰昌　賞＞ 	**小孫 哲太郎（KOMAGO Tetsutaro）** **《NAGAMERU》** ・1974 年東京都生まれ。埼玉県拠点。 ・いく本ものテープで遮られた空間。作品自体がフィルタとなって遮られているという、視覚と感覚が混在するような、場所。見るという事と見えるという事が変わりつつある今だからこそ、日常で使われている単純な素材でフィルタを作り、人の視点の内側と外側を、心の感情を、見たり、見られたり、そんな物事を感じてもらいながら楽しんでほしい。
＜山極 壽一　賞＞ 	**INAGAKI MOMO（イナガキ モモ）** **《JK in the street.（普通の女子高生）》** ・2006 年愛知県生まれ。愛知県拠点。 ・ただのありのままの女子高生の「いま」を、小さな悲鳴とも言えるつぶやきメッセージと共に表現した記録映像作品。プロジェクターで投影された 3 壁面から「いま」の「普通」の「JK」の「リアル」な「日常」の映像と声が、キューブ内いっぱいに広がり体感できる。

Art Award IN THE CUBE 2023 二次審査会　審査講評

<table>
<tr>
<td>

入江　経一（いりえ　けいいち）

（建築家／
デザインディレクター）

</td>
<td>

「触れるもの、絶対に触れないもの」

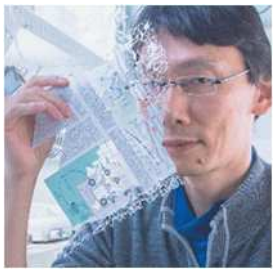
何組かの猿たちが梯子の上下で互いに見つめあっている。互いにそっくりだが片方の猿は片手がなかったり、のど首を欠いていたりして少しだけ完全とは言えない。猿の顔や胴体の一部は鉛のような表面で覆われていて、実は猿ではないことを暗示している。そう、一目見ればわかるように、このユーモラスな猿たちは今やたくさんの自己に分裂した「私」へのアイロニーなのだ。

一体自分はどこにいるのか。今ここにいる自分を自分だと思っているのは幻想に過ぎないのか。作者は分裂し複製された自己をアバターと呼んでいるが、いまやそれは一つどころか多くの自分となって現実空間にもネット空間にも拡散されてしまった。そんな私という存在に生じている事態を、この作品は諧謔をこめて突きつけているようだ。君が思っている自分（リアル）なんて不完全なものさ。猿は手ごわい。

</td>
</tr>
<tr>
<td>

岩崎　秀雄（いわさき　ひでお）

（アーティスト・研究者
／早稲田大学理工学術院
教授、metaPhorest 代表）



</td>
<td>

大変な力作揃いで、まずは作者の方々、裏で奔走してくださった方々に心からお礼申し上げます。審査では、多様なアプローチと成果を前に、どこに力点を置いて評価するのか、テーマとの整合性をどの程度重視するのかなど多くの課題があり、紛糾とまではいかないまでも、様々な議論がありました。大賞作品の選出にあっても意見が相当割れました。河原の石を、集光された太陽光の熱で溶かし、地の下のマグマを想起させるプロジェクトについて、私は「今ココと壮大な地球史的時空間を詩的に切り結ぶ貴重な試み」と評価しました。

審査員賞に選ばせていただいた「橋」を巡る作品も、橋の狭義の機能から拡張し、抽象的なレベルまで含んで何かを繋ぎ、今ココと外部の関係性を開いていくポテンシャルの魅力と、地域に根差した地道なリサーチに惹かれました。ただ、どちらの作品も、本来持ちうる広がりや強度を十分に表現しきれていないのではないか、と僭越ながら感じてしまう部分もあり（私が見落としているだけかもしれません）、今後の発展・展開にも期待したいという意味で、推させていただきました。他にも「サカサゴト」、「One room」といった作品にも、大いに惹かれるところがありました。鑑賞者の方々は、受賞作かどうかに気をとられず、ぜひそれぞれの作品に触れて、心行くまで体感していただきたいと思います。

</td>
</tr>
</table>

北村（きたむら）　明子（あきこ） （ダンサー・振付家／信州大学人文学部教授） Photo by Hiroyasu Daido	CUBE・・・制限とも自由とも捉えることのできるお題目に、全く異なるアプローチを持つ作品群は、一つや二つのテーマ性では収まらない多様性に満ちていた。実作品の体験は、困ったことにほとんど全てが楽しく、“Award”であることを忘れかけた程。視覚性、物質性から時空を広げて思考を巡らせ、五感からイマジネーションの解放・飛躍を誘発し、ストイックな強度やセンスの良さは、より深い解釈の旅を促進する。これらの魔力は作家・作品と鑑賞者の間に生じるものであり、漂う幽霊を追いかける行為のように、確信を失いそうになる波もやってくる。自問自答を繰り返し、“ブレない判断基準”の探求という、喜ばしくも苦しい試練の中で、時間経過とともに掴めてくるものがあった。それは、作家がテーマと真剣に向きあった証跡が、鑑賞・体験者に浸透し、ここから出発する“リアルのゆくえ”とは、いかなるものとして共有され、それが何と、どのように、どこまで繋がり得るものか、と、粘り強くも軽やかにも、問いかけ続けてくる、完結し得ない対話の力だった。
四方（しかた）　幸子（ゆきこ） （キュレーター･批評家／美術評論家連盟会長） 	各作品のレベルは高く、しかも多様で、全体で見応えのある展覧会となっていた。審査では、キューブや今回のテーマへのアプローチ、ビジョンの実現性を重視したが、何よりも作品が放つ力やメッセージを受け止めた。各審査員の観点は示唆に富み、活発な議論が交わされた中、大賞については意見が分かれた。その結果選ばれた千葉麻十佳作品は、川で拾った石を太陽熱で溶かし「マグマに戻す」もので、溶ける石の映像や音の生々しさとともに岐阜から地球史や地球深部へと至る、ささやかながら鮮烈で壮大なまなざしによる。石から地球の連綿とした営みへ「リアル」を接続することで、想像力を喚起するとともに人間の立ち位置を問いかける側面を評価した。 審査員賞の北川純作品は、キューブを即物的に「箱」と見立て、コロナ禍の生活をモノの側から提示した。来場者が搬送物になる体験を提供することで、私たちはショッピングをしているようで実はさせられているのでは、と思わせるドライなユーモアが効いていた。
寺内（てらうち）　曜子（ようこ） （美術家） 	入選した 14 点は、個々の作品のアプローチや表現が違うので、ヴァラエティーの多さを楽しめる展覧会となっていると思う。その中から大賞を選ぶのはとても難しかった。審査員同士の正直な意見を交わして、丁寧に審査出来たのは良かったと思う。 私自身は各作家の「リアルのゆくえ」の内容を云々するよりも、①各作家が自分の信じる「リアル」を、言葉の助け無しに見ただけで伝わる説得力ある作品として完成させたか、②キューブを内側空間だけでなく外側空間もどう使っているか、を判断基準とした。 この基準②から外れた作品の中にも、完成度の高い作品は何点かある。キューブの制約を外すとより良くなっただろうと思われる作品もある。テーマを重視するかキューブを重視するかも作家及び審査員の意見の分かれるところだ。 私は今回の審査を終えて、この大きな自立するキューブから「必然的に生まれた」作品を見てみたい気持ちがより強くなった。

森村（もりむら）　泰昌（やすまさ） （美術家） 	作品を作る。不思議な営みだ。我々はなぜこんなことをするのだろう。審査をしながらずっとそのことを考えていた。入選者14組の作り手たちは、みんな大変な苦労をしている。私もひとりの作り手なのでそれがわかる。だからみんなに賞をとってほしい。でもそれはできない。芸術の評価はスポーツのように数値で明確には表せない。輪郭線がぐにゃぐにゃ変わるおかしげなジグソーパズルのようで、そのとき次第でピタッと当てはまるピースの形がちがってくるらしい。芸術はたぶんAIにも予測が不可能な未知の領域なのだ。ざまあみやがれとちょっと勝ち誇った気分に審査員の私はなれたが、14組のみなさんには申し訳なく思う。ちょっとしたはずみで、誰が受賞するかがガラリと変わるからである。その予測出来ないスリリングな瞬間に審査員の私は立ち会えたが、それは神様の気まぐれで人の一生を左右するような不条理でもあっただろう。この不条理をかいくぐり、喜びにも落胆にも、まあこんなものだろうと鷹揚にかまえ、それでも自分はなぜこうして作品を作り続けているのかと問う。そういう芸術の仲間でいてほしい。審査員は出品者のジャッジメントではなく、むしろ共犯者であると思いたい。
山極（やまぎわ）　壽一（じゅいち） （総合地球環境学研究所所長） 	入選した作品それぞれがとても個性的で評価をつけるのが難しかった。大きく自然に題材を求めたものと人間の内面に入り込んだものとに大別できるように思う。大賞の作品は、地球の表層に生きる私たちにその下を流れるマグマの有様を、岐阜の川の石から歴史を遡ることで示してくれた。 面白いと思ったのはJK in the street.で、リアルの行方の中心にいるのは実はJK（女子高生）ではないか。子供と大人の中間にいて「思春期スパート」のまっただ中にいる。心も身体も急速に成長する。変わっていく社会観、人間観の中で自分を見つめなければならない。本作品には、そんなリアルと反リアルのただ中で立ち止まり、もがいている姿がよく描かれている。「ふつうの」に込められた意味が二重に迫ってくる。「ふつう」を装いながら、その裏に隠れている願望が透けて見える。「違う」、「ウソばっかり」と叫びたくなる自分がいる。全編を流れる願いや現実を、あっさりとエピローグでひっくり返してしまうドンデン返しがすばらしい。作者の演劇的才能の高さがうかがえる。これを機会に大きく飛躍してほしいと思う。